令和２年（2020）
阿づまの光
3月号・Marto

【瑞泉苑土＋高熊山土＋瑞泉苑玉の井のお水、高熊山松釉】

教主さまお作　「瑞の苑（みづのその）」

節分大祭祝詞に感じて

大本総代・福島主会長　嶋貫 光喜

父が主会長をしていた時、留守居役として、大祭のたび、遥拝祭の斎主をさせていただいておりました。四季に合わせた祝詞文はそれぞれ素晴らしく感動したものです。

中でも節分大祭祝詞文の3行目「行く水の流れて早き月日は何時の間にか今年の冬も呉竹の一夜の程に春と明けなむ今宵となりぬ」の一文は感慨深いものがあります。普通に考えれば、一年が経つのは早いもの。再び節分が巡ってきた〜。という事になるでしょうが、こと大本ではそうはいきません。国祖の大神さまが神世三千年のご艱難ご苦労あそばされ、それでも希望を持ってやがて来たる日に向かって着々とご経綸を進め、ついに明治25年旧正月、節分の日を迎えられました。その歓びと〝よしやるぞ〟と言う雄叫びをも感じられる一文です。ご退隠になった時は気の遠くなるような絶望的な思いもあられたでしょう。もちろん私たち人間の思いとその大きさ、広さ、深さにおいて、比べる事は出来ないでしょうが、国祖の大神さまと申せども、その心情は相通じるものがあると思います。

神世三千年、耐えに耐え、忍びに忍びながら「一陽来復」の時をどれほど待ち望んでおられた事であろうか、そしてついに明治25年そのときが訪れた。その国祖の深い思いがこの一文には重なっているようです。祝詞を開き「行く水の・・・・」と奏上していると熱いものがこみ上げ、声が震えてきます。そして大きく息を吸って下腹に力を込めて続けます・・・・。

今、国祖の大神さまが開祖さまや歴代教主さま、教主補さま方を通して示された「綾の聖地」が本来の姿に整備されようとしています。先人達が先輩達がご神業として築き上げてきた、その完成の時期に私たちは生かされています。大本人である事の誇りを胸に、大本人として生きた証を残せるよう、現教主さまのお導きに従って、精いっぱいご奉仕させていただける事を願うばかりです。

題字出口直日
通巻第６１２号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

三千年の天の岩戸も開けはなれ
祝詞の声も高く聞こゆる

出口王仁三郎聖師

あの世を知って現代を生きる

～大本の霊界観～

人はなぜこの世に生まれ、生きなければならないのでしょうか。そして、いつか必ず迎える「死」。人生という旅に大きな目標があれば、その一歩一歩に大切な意味が生まれてくるはず。永遠の命を見つめながら、現代を生きるヒントを見つけてみましょう。

日本の大学が共同利用している統計数理研究所という機関があり、さまざまな分野の統計を公表していますが、その中に「死後の世界」を信じるか信じないか、というデータもございます。国によって違いがありますが、エジプトでは100％の人が死後の世界を信じています。アメリカでは80％。一番少ないのは社会主義国のベトナムの20％です。

日本は、昭和30年代は信じるという人が20％、信じないという人が59％だったのが、平成25年では、信じる人が40％、信じない人が33％になりました。中でも、女性のほうが信じるという人の割合が多く、さらに年配より若い人のほうが信じるという人が多くなっています。

人の本体は肉体ではなく精霊

大本では、教祖の出口王仁三郎聖師が、27歳の時に神使に導かれて死後の世界の様子を見せられ、そのことを『霊界物語』81巻83冊という膨大な書物に残しました。その中で王仁三郎聖師は「現界」と「霊界」の2つの世界があると説いています。「現界」は私たちが肉眼で見えるこの世です。「霊界」は肉眼では見えない精霊の世界で、あの世ともいいます。私たち人間は、この肉体と精霊によって成り立っています。その本体は肉体ではなく、中にとどまっている精霊です。死後の肉体は滅びますが、精霊は肉体から脱離し、「霊界」へと帰っていくのです。

そのことについて大本三代教主補・出口日出麿尊師は、「死後に霊魂が個性をもって存続するということは、われわれにとっては、今日のつぎに明日があるということよりも明確である」と、これ以上のない表現で断言しています。

心の状態が容姿を現す

「死」について、王仁三郎聖師は、「肺臓、心臓の活動が全く止む時こそ、霊と肉とがたちまち分離する時である」と定義しています。ところが近年2つ目の死が作られました。大本が反対する「脳死」です。

「脳死」とは脳不全の状態であり、体は温かく、人工呼吸器の補助があるとは言え、心臓は鼓動しています。昨年も、チェコで「脳死」と診断された母体から赤ちゃんが誕生しています。死体から新しい生命が誕生するでしょうか。心臓が動いている以上、精霊は肉体に留まっており、決して死んでいるのではありません。「脳死」は心臓などを移植するために作られた新たな〝死〟の定義なのです。

さて、霊界は天界（天国）、中有界（八衢）、幽界（地獄）の3つに別れていますが、多くの人が、中有界に進みます。例外として極善の人は真っ直ぐ天界へ、極悪の人は真っ直ぐ幽界へと進みます。

死後、中有界に進んだ精霊は、①外分の状態、②内分の状態、③準備の状態という3つの過程を経て霊界を進みます。①「外分の状態」ではまだ生前の頃の容姿を留めています。②「内分の状態」になると、心の状態が容姿を表します。つまり、心がきれいな人は美しい容姿に、そうでない人は、そのような容姿へと変貌していきます。ここが現界と霊界の大きな違いです。現界では容姿をごまかすことができても、霊界では少しのごまかしも効きません。

そうして③「準備の状態」を経て天国か地獄に必ず進みます。またはもう一度、この世「現界」に生まれ変わってきます。

先祖と子孫はつながっている

以前、子供さんから「先祖の祟りということはありますか？」と聞かれたことがあります。私はすぐに「ありません」と答えました。昇天した先祖から見れば、子や孫、ひ孫です。可愛いに決まっています。祟るわけがありません。

ところが先祖も、20代もさかのぼれば100万人にもなります。その中には、立派な人もいるでしょうが、もしかしたら地獄で苦しんでいる人もいるかも知れない。そのご先祖が頼るのは、どうしても他人ではなく、自分に近い子孫に手を差し伸べるしかありません。そうすると手を差し伸べられた現界の子孫も苦しみを共有せざるをえない。祟っているのではなく、救いを求めているのです。先祖と子孫は、まさに一本の棒のようにつながっているのです。

大本信徒で御井敬三（故人）という方が、王仁三郎聖師からお聞きした話をご紹介します。ある人が、どうしても腹の底から神さまを信じることができなかった。そこで、その人は、「どうぞ神さまのご存在を教えてください」と、3週間、大本の聖地・亀岡の天恩郷にあった月宮殿という至聖所で、毎朝、ご祈願を続けられました。

満願の21日目、月宮殿に至る石段を登っていると、途中で転んで足の爪を剥（は）いでしまったそうです。痛くてうずくまっているところへ王仁三郎聖師が上がってこられて、通りすがりに一言「神さんにお礼いうときなよ」と言われました。その人は、怪我をしている自分をいたわるわ

～21世紀・生きがい講座～

田辺謙二（たなべけんじ）
大本教学委員会委員

けでもなく、「神さんにお礼をいうときなよ」とは何事かと思ったそうですが、痛みをこらえて最後の礼拝を済ませました。

すると、月宮殿近くの建物から王仁三郎聖師がこっちへ来るよう手招きをしていたのです。王仁三郎聖師のもとに行くと、自分の先祖がしてきたことや因縁を詳しく聞かされ、「本当は今日、あんたは両膝の皿を割る大怪我をするところだったが、21日間の祈りのおかげで、足の爪だけですませてもらったんや。だから神さんに御礼いうときなよと言ったんやで」と話されたそうです。

自分も知らないような先祖の話を見通したように話す王仁三郎聖師の言葉に、その人は疑う余地もなく神さまを信じることができたということでした。

この話は、先祖のさまざまな罪障（めぐり）も、信仰と祈りによって贖（あがな）われるということを説いています。

先祖が教えてくれた霊界の実在

また、先祖が直接、霊界の様子を教えてくれたという話もあります。もちろん、こうした事例は特例中の特例です。

それは大本信徒の女性のもとに、嫁ぎ先の祖霊舎におまつりされている実家のおじいさんが毎日のように姿を現して、現界の子孫の行いが霊界の祖先にも影響するということなど、さまざまなことを教えたそうです。その中で、おじいさんが一番伝えたかったことは、「死後の生涯に対して無知識なることは悲哀の中の悲哀なり」（霊の礎）、「世の中に死後の世界を知らぬほど淋しきものはあらじと思ふ」（大本の道）との王仁三郎聖師の教えでした。つまり、この世で生きていく上で、死後の世界を知らないことは、どれほど残念なことであり、悲しいことであるかということなのです。

この世は「修行」の場

20年以上も昔の話ですが、出口聖子四代教主がご存命の時に、私は編集部で、毎月、インタビューをさせていただいておりました。ある時、四代教主から、逆に質問を受けたことがありました。「人は何のために生まれてきたのでしょうか。さあ、答えて」と。

突然で、すぐには答えられませんでした。すると四代教主は、「人は修行するために生まれてきてるんやで」とおっしゃいました。私は「それは辛いなー」と心の中で思いました。その瞬間、「〝それは辛いなぁ〟と思ってるやろ」と言われ、またドキッとしたのですが、「はい」と申し上げると、「でもな、私自身振り返ってみて、辛いことが半分、楽しいことも半分、楽しいことばかりがあるわけでもなく、辛いことばっかりが続くわけでもないんやで」とおっしゃいました。さらに「現界にいる間に、自分の精霊を、より大きく、より強く、よりきれいにして、霊界に帰ったら天使天人になって、神さまの手足となって御用にお使えさせていただく、そのことが現界で修行をする意味なんやで」と、修行の意味を教えてくださいました。

では、自分が進むべき霊界はどうやって決まるのでしょうか。王仁三郎聖師は、「霊界は意志想念の世界なり　われの開きし天国地獄」と示しています。結局、自分自身が作り上げた心の状態（意志想念）の世界へと死後は進んで行くのです。

良心に省みる生活

私が尊敬する、現在102歳のご婦人が富山にいらっしゃいます。この方から教えていただいて、今でも大事にしている言葉があります。それは「良いことも悪いことも、いろんなことがあることは良いことです」という言葉です。良いことがあるのは良いですが、悪いことも必要で、結果として良いことだとおっしゃるのです。いろんな課題を体験し、これを乗り越えようと努力することにより、先程申しました「心を大きく、強く、きれいに」していただけるのだと思います。

私たちにとっていちばん大切なのは「心」です。その心を清め天国を作るために必要なことを、日出麿尊師は「思うことを省みる」「一念三省」と、端的に示しています。人間ですから誰でも「こんちきしょう」と思うこともあります。しかし、そう思ってしまったことをどう省みるか、何度も繰り返し良心に省みることが大切なのです。

米国の精神科医として著名なキューブラー・ロス氏は、自身の著書『死ぬ瞬間』の中でこのように述べています。

「私たちの人生は学校にほかなりません。私たちはそこでテストされ、洗濯機のようなもののなかに放り込まれるのです。その洗濯機からつぶれて出てくるか、磨かれて出てくるかは、誰か他の人ではなく、あなた自身の選択によるのです」

一度きりの人生です。天国を目指して、「今、この時」を大切に、常に省みながら人生を全うさせていただきましょう。

掲載文は、令和元年8月21日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

節分大祭遥拝祭

開教128年節分大祭遥拝祭は2月3日午後6時30分から、斎主・猪子恒東京宣教センター長のもと執行され、81人が参拝した。祭典後には「鬼は内、福は内」の掛け声にあわせ斎主・祭員による豆まきが行われた。また、福引きもあり、食堂では参拝者に甘酒が振る舞われた。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例大祭は2月9日午前10時30分から、斎主・橋本伸作東京宣教センター次長のもと執行され、293人が参拝した。祭員は関東教区各主会青松会員、少年祭員は池田心音さん、玉置巴さん、深津日向大くん、伶人は二絃の会関東支部、『大本神諭』拝読は福井温彦埼玉主会長、添釜は東京主会が担当した。

祭典後、教主さまの開教128年節分大祭ごあいさつを拝聴。ついで鈴木穎一大本本部長があいさつに立ち、このたび発表された『綾の郷整備事業』について「財政的に厳しい時期に、献金のご案内となったが、まず、どうしても用地取得しなければならない。心ひとつに、ご神業に仕えさせていただきたい」と述べ、長生殿ご造営から連なる〝織りなす錦のご神業〟に、理解と協力を求めた。

続いてシテ・猪子恒東京宣教センター長による金剛流仕舞「呉服」が奉納された。直会では、月次祭前日から東光苑を会場に開催されている関東教区少年冬期学級の参加者がご神前に整列、2日間学んだエスペラントで、二代教主さまの「三首のお歌」を先達した。

少年冬期学級の参加者により、エスペラントで3首のお歌が唱和された

「綾の郷整備事業」説明会を開催

祭典直会後、関東教区信徒大会が、午後1時30分から、鈴木本部長を講師にご神前で開催され、120人が参加した。

ご神前礼拝の後、初めに嶋貫光喜大本総代があいさつ。引き続いてDVD「織りなす錦のご神業」が放映された後、鈴木本部長が「綾の郷整備事業について」と題して講話。長生殿の建設構想を描かれた三代さまの思いなどを伝えながら、「教団財政の健全化、立直しや機構改革に取り組み、全国の機関にも大変厳しいお願いをしているさ中ではあるが、教主さまのお気持ちを体しつつ、全信徒の気持ちを一つにして、長生殿正面の土地取得に注力したい」として、冊子『織りなす錦のご神業』を読み進めながら、長生殿ご造営の総仕上げともいえる綾の郷整備事業への協力を呼びかけた。

21世紀・生きがい講座

第203回21世紀・生きがい講座は1月15日、大本東京本部・東光苑で開催され、猪子恒・東京宣教センター長が、「一片のお土を拝む時代へ」～大本開祖の姿に学ぶ～と題して講話した。受講者は30人。

猪子講師は、大本の歴代教主・教主補さまの「お土」のお示しを抜粋し、「出口なお開祖は『お土があるから皆が生きていられる。百万の金よりも一握りのお土の方がどれほど大切か。金は滅びのもと、世界中の人にこれが解ったら、これがみろくの世（世界平和）になる』と示されている」と紹介。また二十世紀に起きた環境破壊にも触れ「土壌は、地球上の生命を維持する要。もっと認識を高め、適切に管理し守ることが、われわれの望む未来に貢献することになる。土壌を見つめ直し、持続性を増進していかなければならない」と述べた。

参加者からは「土壌劣化という言葉を聞き、大本のお土のお示しの大切さが理解できた」「自分の家や近所でお土に触れていきたい」等の声が寄せられた。

4月 東光苑祭典・行事予定

12日（日）午前10時30分～
東光苑春季大祭

15日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（大本東京本部）
講題 運命を開拓する方法
～一霊四魂を発揮して～
講師 椎野恭三（総務管理課長）

25日（土）午前9時30分～
大本いろは研修会（春の集い）

26日（日）午前10時30分～
企業繁栄安全祈願祭

29日（水・祝）午前10時30分～
四代教主毎年祭（19年）

第38回 企業安全繁栄祈願祭

日　程　4月26日（日）午前10時30分
場　所　大本東京本部・東京宣教センター
申込み　ご希望の方は申込用紙を送付しますので、下記までご連絡ください
※（昨年申し込みいただいた方には、こちらから郵送いたします）
申込先　〒110-0008 台東区池之端2-1-44
大本東京宣教センター内 東光経友会
TEL 03-3821-3701　FAX 03-3821-5283
mail tokyohonbu@oomoto.or.jp
※玉串は後日郵送か当日持参かを必ず明記してください
玉串料　一企業につき1万円以上（申込書に添えて玉串袋にてお納めください）
お　札　ご希望の方には「大本平安彌栄祈願」の水引木札（申込企業名入り）をご下附させていただきます。（1体につき、玉串料は別途1万円以上）
締　切　4月20日（月）
※ご祈願は5月2日（土）までの1週間執り行います